

## 第 16 回小児在宅ケア研究会年次集会参加者の感想

- 退院後訪問や退院時の早見表など、システムや方法はもちろんですが、どうすれば患者家族らしい生活が送れるかを真摯に考えて工夫されている点に感銘を受けました。また、退院時カンファレンスでの支援相談員の参加が増えてきていることに自分の施設・地域ではまだ多くないので、今後検討することを考える機会となりました。
- 病院に勤務していると地域での生活が分からず、在宅移行できるようにすることが目標になっていることがあるため、訪問看護ステーションなど様々な立場の方から話を聞いてよかったです。
- 支援する場がそれぞれ異なる看護師の方々から、大変素晴らしい実践について詳細にきくことができた。また、小児在宅ケアが着実に進歩していると感じた。
- 小児領域だけでなく、在宅全体として考えていけることで、子どもと家族の成長発達を支えていくというところが深まったと思います
- 医療的ケアのある子どもの親の気持ちが変わっているつもりであったが、新たに気付いたことがありました。謙虚さと愛情を持ち、倫理的な考え方をしながら看護をして行こうと改めて感じました。
- 在宅への退院支援をする際の視点など勉強になりました。また、コロナ禍で面会制限がある中で、きめ細かな家族(面会できない祖父母も含めた)との情報共有や退院指導、他職種連携での支援の重要性を感じました。同じような悩みや課題が他病院や訪問看護の場でもあることを感じました。今後も、悩みながらもスタッフと協力して、児や家族の望む生活への支援に取り組んでいきたいと思いました。
- 講義では、子どもと家族が主体となれることの大切さや、訪問看護での生活の中の看護について改めて学ぶことができました。事例では、医療的ケア児の在宅移行支援の実際や相談支援専門員との連携、地域で暮らす医療的ケア児と家族への支援について知識を得ることが出来ました。
- "今、小児の在宅看護で何が起きているのかを知ることができ、どうあったら良いのか立ち止まって考える機会になりました。
- 具体的な事例を挙げていただき、とても分かりやすかったです。生活の一部に、医療・介護がある方にとって、病院職、地域職、多職種連携の充実が退院後の生活に大きく影響することを、再認識することができました。家族が主体であり、家族が支援者を利用する側であるという様式に、移行していくべきであることも、共感できました。
- 家族の生活を観察することや、時間軸でのかわりを大切にして、利用者様やご家族に、安心、安定した生活ができるよう、支援していきたいと思います。
- 利用者様やご家族との関係は、互いに相互作用が発生していて、支援者の人間性が、支援を受ける側に、大きな影響をもたらすことを知っておくべきだと思いました。
- web 開催にいただいたため、京都まで行く時間がなくても参加できてよかった。